



Title	「政治的教養」からみる1930年代の三木清の教養論
Author(s)	Han, Wei
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100492
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「政治的教養」からみる 1930 年代の三木清の教養論

HAN Wei (日本学・M1)

1. はじめに

教養主義といえば、大正教養主義がよく知られている。しかし、1930 年代には、1936 年から刊行が始まった河合栄治郎（1891-1944）編集の『学生叢書』をはじめとして、大正教養主義を批判しつつ展開された新しい議論が生まれてきた。新しい教養を求める多様な議論と、教養に焦点をあてた多数の書物は、1930 年代の教養論の隆盛を導き、戦時期における思想動向の一つをなしている。そのなかで、三木清（1897-1945）は、当時の知識人にしばしば見られた政治的無関心から出発しつつ、時代と交わるものとして教養を再定義しようとした一人であった。政治や科学を排斥する大正教養主義の伝統に対して、政治という要素を取り入れようとした三木の試みは、当時としては珍しい貴重な取り組みである。

本発表では、1930 年代の教養主義を概観したうえで、三木清が教養を論じた 4 つの文章を分析し、次の 2 点を明らかにする。すなわち、①三木はいかに教養に取り組んだのか、そして、②三木の教養論は 1930 年代においてどのように位置づけられるのか、という 2 点である。このような問題意識を持ちながら、河合の教養論と対比することで、三木の教養論の特徴と意義を明らかにする。以上のようななかたちで、1930 年代の教養主義の一側面に光をあてることが本発表の目的である。

2. 1930 年代の教養主義

近代日本における教養・教養主義については、筒井清忠、竹内洋、苅部直、渡辺かよ子といった研究者による議論が蓄積されている。本発表の主題である 1930 年代の教養論を考察するうえで、まず確認しておかなければならぬのは、概念としての教養と、歴史的前提としての大正教養主義である。

ドイツ語 *Bildung* の訳語とされる教養は、理想の姿を目指す人間形成の過程を意味するとされる。¹教養を哲学、歴史、文学など人文学の読書に求める方法と態度は、一種のイデオロギーとして形成された。続いて、阿部次郎『三太郎の日記』（1914 年）、和辻哲郎『古寺巡礼』（1919 年）、倉田百三『愛と認識の出発』（1921 年）などが刊行されることにより、大正教養主義は読書による人格陶冶を意味するものとして定着した。

大正後期、マルクス主義と社会主義の隆盛にともない、大正教養主義は社会離脱、独善主義と批判を招き、次第に影響力が失われていった。しかしながら、1930 年代中頃、思想弾圧のなかでマルクス主義と社会運動が後退を余儀なくされた結果、教養に関する議論が蘇った。その代表的なものは、河合栄治郎編集の『学生叢書』と彼の教養論であった。

1936～1941 年に刊行された『学生叢書』は、東京帝国大学教授の経済学者河合栄治郎により、「学生と○○」という各巻のタイトルのもと、教養、生活、学園、読書等さまざまな角度から学生に「一般的助言」を与える学生指南書であった。『学生叢書』から窺えるのは、河合の教養論が、学生向けのものであったということである。河合は教養を教育から区別することで教養の「自我を巡る三重奏」²を作りあげたとされる。すなわち、「自我」が、「自我」を客体とし、理想の「自我」になるのが教養である、という関係性である。それを実現するために、河合は、「自覚」という方法³を提示した。河合は、大正教養主義と同じく、個人主義、人格主義を重要視したが、教養を社会改革の基礎と位置づけるかたちで、ある程度大正教養主義の克服を果たした。

¹ 市川昭午（2020）. 『エリートの育成と教養教育：旧制高校への挽歌』東信堂, 93.

² 青木育志（2012）. 『教養主義者・河合栄治郎』春風社, 25.

³ 具体的な方法としては、古典中心の読書、討論、手紙、日記、他人との交流などが挙げられた。

『学生叢書』の売れ行きに刺戟され、『岩波新書』を含め教養と関わるさまざまな文庫・新書や講座が相次いで刊行されることになった。教養書出版の発達は教養論を展開する場を与え、教養論の隆盛を促した。こうして、大正教養主義を批判しつつ新しい教養を求めようとする議論が、1930年代の教養主義を形成していった。

3. 三木清の「教養」への接近

1930年代において、論壇ジャーナリストとして活躍していた三木清は、河合栄治郎が大学教授として学生に理想主義的な教養を呼びかけていたとの対比において、異彩を放っている。

三木は、兵庫県揖保郡(現在の竜野市)生まれで、1914年に第一高等学校に入学した。東京で「孤独な田舎者」として「内省的な彷徨時代」を送りつつ、第一次世界大戦すら察知することなく教養思想の影響のもと阿部や倉田ら教養派の作品ならびに西洋の古典を読んでいた。1917年に入学した京都帝国大学での学びについては、「波多野先生や深田先生の講義、特にその談話とその人格から大きな感化を受けた」と記しており、三木は、大正教養主義の影響のもとで成長したことを明らかにしている。三木は、中学から一高・京大にかけての時期の政治や社会に対する無関心について、自分は「古典派ないし教養派」であると認め、大正教養主義は「ヒューマニズムの傾向」であったとしている。⁴

1930年に共産党に資金を提供したとされ治安維持法違反で逮捕されて法政大学を退職させられてから、三木は哲学研究に従事すると同時に、ジャーナリストとしても活躍するようになった。満州事変の勃発をきっかけに言論統制が強まっていくなか、三木は「不安の思想」およびその超克とされる新しいヒューマニズムをめぐって言論活動を行っていた。彼によれば、「ヒューマニズムといふ言葉は教養を離れて兼ねることができ」⁵ない。したがって、三木においては、教養の問題は、彼のヒューマニズム論に基づけられていた。そして、「人間の論理、ヒューマニズムの論理が政治に対する批判的な力とし強化されて現はれることが大切である」⁶として、政治的教養を呼びかけることになった。

三木は、アカデミズムと対置するかたちでジャーナリズムの特徴と意義を説明しつつ、教養の観念に触れている。すなわち、アカデミズムにおける古典的、文化的教養を重んじる傾向に対して、ジャーナリズムの与える教養は「現代的」、「政治的」であるというのである。⁷こうして、三木は、「ヒューマニズムの名において、ジャーナリズムの舞台で」⁸教養の問題に取り組んでいくことになった。

4. 「政治的教養」をめぐって

三木が教養・教養主義を主張した論文は、基本的にはヒューマニズム、人間学を研究した論文である。特に①「現代教養の困難」(読売新聞夕刊『一日一題』1936年11月10日)、②「教養と時代感覚」(『新愛知』1936年11月24日)、③「教養論の現実的意義」(『改造』1937年4月、のち「教養論」に改題)、④「知識階級と政治」(『日本評論』1937年4月)ということになる。以上の4点によって、三木は教養と時代を連結し、諸々の教養論に対して評価を行いながら自らの教養論を展開した。

三木は教養という観念をどう考えたのか。彼は「教養とは単に物を知ることでなく、自己の人間を形成すること」と述べ(三木、1936: 289)、教養における文化の観念(知識)を含みながら人間の観念(人間の理想)を焦点化した。人間の観念が変化したら、教養の要求も変わるべきであるという。三木のいわゆる「現代」(この文脈では1930年代なかば)における理想的な人間像は、「個人主義的なものではなく、社会的歴史的人間」(三木、1936: 286)であるから、社会や政治の要素を強調するのは当然のことであった。そこで、三木は、「新時代の教養」として、「科学的教養」ないし「社会科学に関する教養」を提示しながら「政治的教養」へと進んでいった(三木、1936: 289)。ここには、マルクス主義の影響のもと現実社会とのつながりで教養の観念を捉え直す三木の試みを見ることができる。

三木は、哲学や芸術への偏りと政治の排斥といった大正時代から受け継がれてきた教養主義の伝統のうちに、教養という言葉の次のような「歴史的含蓄」を見出した。すなわち、もともと「政治的性格」をもっていなかったBildung

⁴ 三木清 (1966). 「読書遍歴」『三木清全集 第一巻』岩波書店, 369-432.

⁵ 三木清 (1937). 「時代の感覚と知性」『三木清全集 第十三巻』岩波書店, 398.

⁶ 三木清 (1967). 「政治の論理と人間の倫理」『三木清全集 第十五巻』岩波書店, 158.

⁷ 三木清 (1938). 「ジャーナリズム」『三木清全集 第十四巻』岩波書店, 131.

⁸ 宮川透 (2007). 『三木清』東京大学出版会, 155.

の理念が日本に伝わってきて、「文明」から切り離された「文化」と組み合わされた結果、教養は政治と対立する理念として定着した(三木, 1937: 312)。その対立が具現化され、「インテリゲンチャは政治的関心の後退とともに大衆への関心を離れて」、「大衆に対する啓蒙」の役割を失いつつあった(三木, 1937: 324)。そこで、三木は、「政治的教養があらゆる教養の基礎となることによって教養は大衆性を得る」と、インテリに訴えた(三木, 1937: 124)。教養を個人にしか関わらないものとした河合の教養論(渡辺, 1997: 88)と比較すると、教養の政治性・大衆性を説いた点に、三木の議論の根本的な差異があったことがわかる。

ところで、当時の教養論には、「西洋的教養」の行き過ぎに対して、「日本の伝統的なもの」を強調し、平衡をはかる必要を説く主張があった。たとえば、河合は、「我々は日本と云ふ特殊を活かすことによりてのみ普通に生きることが出来るのである」⁹と述べている。三木はそのような平衡論をファシズム的文化論の流行に逆らうことのできない「自由主義者の妥協的な、消極的な思想」と批判的に評価した。このように、三木は、日本の伝統への回帰を批判しながらを指摘しながら、日本精神論やナショナリズムの盛行を批判するに至った。それに代わるものとして、三木は、「文化の生産の立場」から、「東西文化の融合とか統一とかいう理念」を主張している(三木, 1937: 320)。この三木の立場は、1938年の東亜新秩序声明以後、彼が関与していく昭和研究会での言論活動につながっているといえるだろう。

5. おわり

以上、三木は大正教養主義における政治的無関心と大衆離脱、同時代の教養論における妥協と屈服を見極めて批判しつつ、現実向け・政治向けの教養をインテリに、またインテリから大衆に働きかけようとした。また、三木は、人文学、古典を中心とするそれまでの教養主義を問題視し、新しい教養を歴史的視点から要求した。1930年代の教養論の重要な潮流は、個人主義に基づく河合らの教養論であったが、それとの対比において、大衆の存在を意識し大衆とつながるための政治的教養を掲げた三木の教養論は、1930年代半ばという時代において、重要な思想史的意義をもっていたといえる。

ところで、本発表で見えてきたような1936、37年の三木の政治的教養をめぐる議論は、1938年の東亜新秩序声明以後の彼の昭和研究会へのコミットメントやそこでの言論活動へと、いかに展開していったのだろうか。この点の解明には、次の課題として取り組むこととした。

参考文献

- 苅部直 (2007). 『移りゆく「教養」』NTT出版.
竹内洋 (2003). 『教養主義の没落：変わりゆくエリート学生文化』中央公論新社.
筒井清忠 (1995). 『日本型「教養」の運命：歴史社会学的考察』岩波書店.
三木清 (1936). 「現代教養の困難」『三木清全集 第十六巻』岩波書店, 175-177.
三木清 (1936). 「教養と時代感覚」『三木清全集 第十三巻』岩波書店, 285-289.
三木清 (1937). 「教養論」『三木清全集 第十三巻』岩波書店, 310-325.
三木清 (1937). 「知識階級と政治」『三木清全集 第十五巻』岩波書店, 118-132.
渡辺かよ子 (1997). 『近現代日本の教養論：一九三〇年代を中心に』行路社.

⁹ 河合栄治郎編 (1940). 『学生と日本』日本評論社, 1. (初版 1938 年)